

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370700

研究課題名(和文) 応答ストラテジーから考える日英語の省略分裂文と虚辞代名詞主語の第二言語習得研究

研究課題名(英文) Cleft constructions and expletive pronouns in English and Japanese: A view from L2 acquisition studies

研究代表者

吉村 紀子 (Yoshimura, Noriko)

静岡県立大学・その他部局等・特任教授

研究者番号：90129891

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、応答ストラテジーの重要性に鑑み、第二言語習得における問題点を日英語の比較統語論の観点から予測し、その問題点について日本語が母語の英語学習者と英語が母語の日本語学習者を対象に実施した双方向調査を通して考察し、応答学習に対して効果的な指導方法を提案するのが目的であった。

実験の結果、焦点情報は英語では「埋込み文」、日本語では虚辞代名詞による「省略分裂文」を用いる違いが母語の転移として応答ストラテジーの習得に影響することが明らかになった。問題点の解決に向けて明示的指導を短期間試行したところ、一定の成果が見られたことから、応答学習を外国語談話教育の中に取り入れることが重要だと述べた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was three-fold: (a) To predict difficulties L2 learners face in acquiring answering strategies (AS) from Japanese-English comparative perspectives, (b) to conduct bidirectional experiments on the acquisition of AS by English-speaking learners of Japanese and Japanese-speaking learners of English, and (c) to investigate the effects of explicit instructions on the learning of AS in L2 acquisition.

The results of our experiments showed a relatively strong L1 transfer effect in both learner groups, namely, the uses of focus phrases in-situ in L2 Japanese and reduced cleft constructions in L2 English. The effects of our preliminary instruction were affirmative in helping the L2 learners gain access to available AS readily in the target language even though the length of teaching was short. Given these results, the study emphasized the importance of teaching AS in the foreign language classroom, making L2 learners behave more appropriately in oral communication.

研究分野：理論言語学・教育言語学・第二言語習得論

キーワード：応答ストラテジー 省略分裂文 フォーカス語句 虚辞代名詞 非顕示代名詞 第二言語習得 母語転移

1. 研究開始当初の背景

応答ストラテジー(answering strategy)はオーラルコミュニケーションにおいて疑問詞疑問文で求められている情報を応答において提供する方策である。この情報交換では、話し手は聞き手にわかりやすく端的に伝達するために、該当語句を焦点化した「フォーカス語句」として表現する。

応答ストラテジーの第二言語習得における問題点は、フォーカス語句を言語表現においてどのように表示するか、そのストラテジーが言語によって異なることにある。Belletti (2009)の分析によれば、フォーカス語句はスペイン語やイタリア語では文末に移動し、英語では移動せず元の位置に残留し(in-situ)、そしてフランス語や日本語では省略分裂文(reduced cleft)を用いて表示される。

この言語間の違いが母語からの転移として影響を与えるために、応答ストラテジーの習得はむずかしいと予測される。しかしながら、このテーマに関するリサーチは始まったばかりで先行研究は数少なく、特に日本語と英語の応答ストラテジーの第二習得研究については本研究が問題解決の第一歩である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(I)第二言語としての英語と日本語の応答ストラテジーの習得を「主語」と「焦点」という2つの観点から調査し、(II)その研究成果を初級レベルの外国語教育、特に談話教育に試行的に応用し、(III)その成果を指導法や教材の開発に向けて繋げて行くことである。

具体的には、日本語と英語の統語-談話インターフェイスの比較考察(例えば、(1)~(4))から、「応答学習のつまずき」が日本人英語学習者の場合は「虚辞代名詞主語」と「省略分裂文」に、また英語母語話者で日本語学習者の場合は「顕示代名詞主語」と「埋込み文」にそれぞれ起因すると理論的に予測される。

- (1) a. 誰がピザ食べたの。
b. マリー。(虚辞主語・省略分裂文)
- (2) a. Who ate the pizza?
b. Mary ate it/Mary did. (埋込み文)
- (3) a. マリーは何、食べたの。
b. チョコレートケーキ(だよ)。
(虚辞主語・省略分裂文)
- (4) a. What did Mary eat?
b. She ate a chocolate cake.
(顕示代名詞主語・埋込み文)

このように予測された習得上の問題点を実験調査によって実証的に検証し、その成果の示唆するところを言語教育に役立てて行く。

本研究は応答ストラテジーが外国語の談話教育において早期の学習項目であると捉える立場から、初級学習者が習得する上で直面する談話の困難点を統語-談話の接点で説明することが重要であると考えられる。

3. 研究の方法

①被験者

本研究は英語を外国語として学習する日本語母語話者と日本語を外国語として学習する英語母語話者を対象とした双方向型プロジェクトである。その目的に沿って、日本と北米の大学で学ぶ大学生を対象に調査を行なった。分析に用いたデータは日本人大学生12人とアメリカとカナダで日本語を学ぶ英語母語話者の大学生15人から収集した。(なお、アメリカでの資料収集には本研究の協力者であるオハイオ州立大学の中山峰治先生に、またカナダの大学での資料収集には静岡大学の藤森敦之先生に、それぞれご協力いただいた。)

②資料収集

事前に準備した挨拶・Yes-No 質問・疑問詞疑問文から成る質問表を用いて、被験者に個別インタビューを実施し、応答を録音した。例えば、英語の質問は(6)、日本語の質問は(7)等を用いた。

- (6) a. Who taught you Oral Communication in the first semester?
b. What did you study last night?
c. Which fruit do you like best?
d. When did you graduate from high school?
- (7) a. 誰が日本語のクラスを教えてくださいか。
b. 昨日の夜は何を勉強しましたか。
c. 今朝は朝ごはんを食べましたか。何を食べましたか。
d. いつ高校を卒業しましたか。

このように、応答のフォーカス語句が主語(6a)(7a)、目的語(6b,c)(7b,c)、副詞句(6d)(7d)となるように企画した。

インタビューは2か月の間隔を置いて2回実施し、その間に2回の試行教育を行なった。

4. 研究成果

まず、英語学習者を対象にした実験では、焦点語句が主語(6a)では83.33%、副詞句(6d)では56.56%の割合で省略分裂文を用いた。例えば、(8)のような応答が代表的な答えで、これらは(9)のような、虚辞代名詞itを主語に持つ省略分裂文の構造であると分析した。

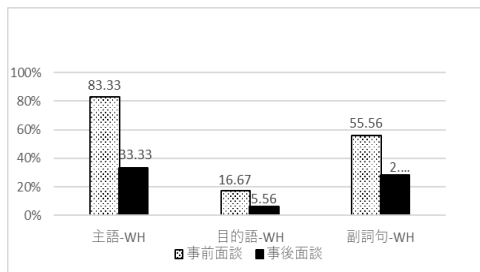
- (8) a. Mr. Bailey.
b. In 2014.
- (9) a. [~~It was~~ Mr. Bailey [~~that taught it~~]].
b. [~~It was~~ in 2014 [~~that I graduated from high school~~]].

ただし、目的語での省略分裂文の使用率は16.67%であった。この顕著な違いは日本語が主語省略言語(subject pro-drop)である点から説明できると述べた。

その後、被験者に対して30分の試行教育

を授業の中で2回実施した結果、焦点語句が文中に埋め込む構文に、例えば(9)のように、主語では66.67%、副詞句では97.22%に改善された(グラフ1参照)。

- (9) a. Mr. Bailey did.
b. I graduated in 2014.



グラフ1 省略分裂文応答率(%)

日本人英語学習者にとって、明示的な指導学習は期間が短くても応答ストラテジーの習得において実質的に一定の効果が上がることがわかった。

次に、日本語学習者(L2)(英語母語話者15名=北米の大学で1~2年間日本語を勉強した大学生)とコントロール群の日本語母語話者(L1)(=5名)への個別インタビューの結果を分析した。表1は焦点語句が主語と目的語、また表2は焦点語句が目的語と副詞句となる応答を「埋込文」対「省略分裂文」の観点からまとめたものである。

表1 「埋込文」対「省略分裂文」(%)

問	(7a)		(7b)	
応答	～です。	～が教えています。	～です。	～を勉強しました。
L1	88.89	11.11	60	40
L2	61.54	38.46	7.14	92.86

表2 「埋込文」対「省略分裂文」(%)

問	(7c)		(7d)	
応答	～です。	～を食べました。	～です。	～に卒業しました。
L1	80	20	76.92	23.08
L2	37.5	62.5	22.22	63.63

フォーカス語句が主語(7a)では、日本語学習者の応答率は省略分裂文が61.54%で、埋込文より優勢であった。他方、フォーカス語句が目的語(7b, c)では62.5~92.86%、後置詞句(7d)では63.63%の割合で応答を埋め込む文を用いた。例えば、(10)にあるような応答が産出された。

- (10) a. 漢字を勉強しました。
b. バナナとパンを食べました。
c. 2014年に(高校を)卒業しました。

これらの結果から、特に応答が目的語と副詞句の場合、日本語学習者も英語からの転移

の影響を受けて応答を文構造のWH句の位置に応答を埋め込むストラテジーを選択することがわかった。また、英語学習者と同様に、応答が主語の場合、その転移は比較的少ないことが明らかとなった。

以上、主語・目的語・副詞句の焦点語句の違いから応答ストラテジーの第二言語習得を調査した結果、特に注視したい発見は、応答ストラテジーとして日本人英語学習者では省略分裂文の使用率が「主語」の方が「目的語」より高かったのに対して、英語母語日本語学習者では逆に埋込文の使用率が「目的語」の方が「主語」よりも高かったという非対称的な違いである。この興味深い差異は母語の転移と主語代名詞省略の観点から説明できる。すなわち、日本人英語学習者は日本語の省略分裂文の応答ストラテジーが虚辞代名詞 pro と関係して主語の応答に転移しやすく(「~(の)だ」)、他方、英語母語日本語学習者は主語代名詞省略を早期に習得できるようなことから、主語が応答の時に省略分裂文を選択するのはそれほどむずかしいことではないと考えられる。

今回実施した試行教育の結果はポジティブであった点から、応答ストラテジーを外国語教育課程の中で談話教育の一環として学習指導して行くことが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

①Atsushi Fujimori, Noriko Yamane & Noriko Yoshimura. The acquisition of prosodic focus marking in English dialogs and narratives. *Proceedings of Pacific Second Language Research Forum* 2016. (査読無) 201753-57.

②吉村紀子・中山峰治・藤森敦之. 「日本語の応答ストラテジー—第二言語習得研究からの展望」『第27回第二言語習得研究会予稿集』(査読無) 2016. 65-71.

③ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, & Noriko Yamane. Interlanguage prosody in English dialogs and narratives: An L1 transfer issue. (査読有) 『中部地区英語教育学会紀要』45号. 2016. 9-15.

④Noriko Yamane, Noriko Yoshimura, & Atsushi Fujimori. Prosodic transfer from Japanese to English: Pitch in focus marking. (査読有) *Phonological Studies* 19. 2016. 97-104.

⑤Mineharu Nakayama, Noriko Yoshimura, & Shinsuke Tsuchiya. Referring to Cinderella in L2 Japanese: A preliminary study. (査読有) *Buckeye East Asian Linguistics* 2. 2016. 58-68.

⑥ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, & Noriko Yamane. Japanese learners' acquisition of English L2 prosody. L1 transfer and effects of classroom instruction. (査読有) *Ars Linguistica* 22. 105-118.

⑦ Takano Kondo & Noriko Yoshimura. Acquiring answering strategies in English. (査読無) *Journal of International Relations and Comparative Culture* 14. 2016. 79-91.

⑧ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, Noriko Yamane. The development of CALL materials for learning L2 English prosody. (査読無) *Conference Proceedings of ICT for Language Learning*, 8th edition. Libreriauniversitaria.it edizioni. 2015. 249-254.

⑨ Noriko Yoshimura, Atsushi Fujimori, and Tomohiko Shirahata. Focus and prosody in second language acquisition. (査読無) 『静岡県立大学 国際関係・比較文化研究』13巻2号. 2015. 21-36.

⑩ Shinsuke Tsuchiya, Noriko Yoshimura, & Mineharu Nakayama. Subject nouns in L2 Japanese storytelling: A preliminary study. (査読有) *Ars Linguistica* 21. 2015. 89-102.

⑪ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, Tomohiko Shirahata. Acquisition of prosodic focus marking by Japanese ESL learners. (査読無). *IEICE Technical Report* (114)/(176). 2014. 49-53.

⑫ 吉村紀子. (2014) 「省略分裂文の構造と機能」日本語文法学会第15回大会予稿集. 149-156.

[学会発表] (計13件)

① Mineharu Nakayama, Noriko Yoshimura, & Atsushi Fujimori. Japanese EFL Learners' Interpretations of Reflexives and Pronouns in Control Constructions. International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics. (査読有) 2017年3月10日～12日. 香港中文大學. 香港 (中国).

② Atsushi Fujimori, Noriko Yamane, & Noriko Yoshimura. The acquisition of prosodic focus marking in English dialogs and narratives. 環太平洋第二言語研究フォーラム 2016 (PacSLRF2016) コロキアム. (査読有) 2016年9月9日～11日. 中央大学.

③ 吉村紀子・中山峰治・藤森敦之. 『日本語の応答ストラテジー: 第二言語習得研究からの展望』第27回第二言語習得研究会. (査読有) 2016年12月17日～18日. 九州大学.

④ Atsushi Fujimori, Noriko Yamane, & Noriko Yoshimura. Identifying syntax-driven intonation phrases in native and non-native Japanese. 24th Japanese/Korean Linguistics Conference. (査読有) 2016年10月14日～16日. 国立国語研究所.

⑤ Noriko Yamane, Noriko Yoshimura, & Atsushi Fujimori. Japanese EFL learners' production of pronouns and articles in English: Evidence for L2 prosodic structures. Acoustic Week Canada 2016. (査読有) 2016年9月21日～23日. バンクーバー市 (カナダ).

⑥ Noriko Yamane, Atsushi Fujimori, & Noriko Yoshimura. Formation of AP and IP by English

JFL learners. 8th Pronunciation in Second Language Learning and teaching (PSLLT) Conference. (査読有) 2016年8月12日～13日. カルガリー大学 (カナダ).

⑦ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, & Noriko Yamane. (2015). The development of CALL materials for learning L2 English prosody International Conference ICT for Language Learning. (査読有) 2015年11月12日～13日. フィレンツェ市 (イタリア).

⑧ Atsushi Fujimori, Noriko Yamane, & Noriko Yoshimura. Effects of explicit instruction of focus marking in L2 English. (査読有) 全国英語教育学会第41回熊本大会. 2015年8月22日～23日. 熊本学園大学.

⑨ Noriko Yamane, Atsushi Fujimori, and Noriko Yoshimura. Needs of explicit instructions of English prosody for Japanese EFL learners. (査読有) 日本音韻学会 Phonology Forum 2015年8月19日～8月21日. 大阪大学.

⑩ Atsushi Fujimori, Noriko Yoshimura, and Noriko Yamane. Interlanguage prosody in English dialogs and narratives: An L1 transfer issue. (査読有) 第45回中部地区英語教育学会和歌山大会. 2015年6月27日～28日. 和歌山大学.

⑪ Takako Kondo & Noriko Yoshimura. *Effects of Explicit Instruction on Japanese EFL Learners' Acquisition of Answering Strategies*. (査読有) British Association of Applied Linguistics (BAAL) Language Teaching and Learning. 2015年6月2日～3日. エジンバラ大学 (英国).

⑫ 吉村紀子. 「省略分裂文の構造と機能」単著. 日本語文法学会第15回大会. 2014年11月22日～23日. 大阪大学.

⑬ 藤森敦之・吉村紀子・白畑知彦. 「日本語を母語とする英語学習者にみる韻律的焦点標示の習得」(査読有) 電子情報通信学会『人間の言語の処理・学習』2014年8月12-13日. 東京大学.

[図書] (計2件)

① Mineharu Nakayama & Noriko Yoshimura. The Modularity of Grammar in L2 Acquisition. *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (M. Nakayama (編). Berlin: Mouton de Gruyter. 2015年. 235-270.

② Tomohiko Shirahata, Noriko Yoshimura, & Koichi Sawasaki. Locality and Disjointness in Adult Second Language Acquisition. C. Hamman & E. Ruigendijk (編) *Language Acquisition and Development: Proceedings of GALA 2013*. 2015年. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing. 460-475.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村紀子 (YOSHIMURA NORIKO)

静岡県立大学・言語コミュニケーション
研究センター・特任教授

研究者番号：90129891

(2)研究分担者

近藤隆子 (TAKAKO KONDO)
静岡県立大学・国際関係学部・助教
研究者番号：60448701

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

中山峰治 (NAKAYAMA MINEHARU)
オハイオ州立大学 (米国) 東アジア
言語文学部・教授